

学位論文審査の結果の要旨

岡田恵美子

本研究では、染色体に損傷を受けた細胞が分裂する際に生じる小核が、消化器において遺伝毒性の指標となることを明らかにした。まず、ラットの腺胃を対象とした腺胃小核標本作製法を世界に先駆けて考案し、胃を標的とする遺伝毒性発がん物質の評価に有用であることを明らかにした。さらに同一個体において胃、大腸、骨髄における小核誘発性を同時に検出することが可能であり、この手法により食品添加物等の生体における遺伝毒性の危険性を適切に評価できることを証明した。加えて、腎臓を含む多臓器小核試験系も確立し、腺胃小核試験法を一般毒性試験へ組み込むことを提言した。これらの知見は遺伝毒性発がん物質の評価研究に大きく寄与するものである。

以上のように、本論文は、多くの新しい知見を有すること、論文の内容、構成および公表論文数などから、本学位論文審査委員会は、全員一致して、本論文が博士（農学）の学位論文として十分価値があるものと判断し、合格と判定した。